

【文部科学省委託事業】

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業

（学習障害のある児童生徒等に対するＩＣＴを活用した効果的な支援に関する実践研究）

令和７年度成果報告書

～ 今年度までの事業実施状況と今後の展望 ～

令和８年３月３１日

玖珠町教育委員会
（大分県）

事業背景等・事業目標

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業
〔学習障害のある児童生徒等に対するＩＣＴを活用した
効果的な支援に関する実践研究〕
玖珠町教育委員会

事業背景・自治体における課題

事業背景

- 早期発見と個別最適な学びの実現 … 学習に困難を抱える児童を早期に発見し、一人ひとりのニーズに応じた個別最適な学びを保障することが、現代の教育において強く求められている。
- 切れ目のない支援体制の構築 … 通級指導教室での指導と並行して、通常の学級（交流学級）での学習機会を保障し、切れ目のない支援体制を構築することが重要視されている。
- 将来の自立を見据えた教育活動の展開 … 学習面での支援にとどまらず、将来の自立に不可欠な社会性（ソーシャルスキル）の育成を図る教育活動の展開が必要とされている。
- 組織的な取組体制の整備 … 学校全体で特別支援教育に関する共通理解を深め、組織的に取り組む体制を整えることが不可欠である。

課題

- 早期発見・特性把握の課題 … 児童の特性を早期に把握し、適切な支援につなげるための体制が十分に整備されていない。
- 個別最適な学びの実現における困難性 … 通級指導教室に通う子どもたちが抱える特性は様々であり、一人ひとりに応じた教材を準備して教育活動を行うことは物理的・時間的に困難な面がある。
- ソーシャルスキル育成の指導体制 … 将来の自立に不可欠なソーシャルスキルの育成に関する指導体制が十分確立できていない。
- 組織的対応力の不足 … 教職員の指導力向上や、学校全体で特別支援教育に取り組もうとする意識の醸成（チームとしての対応力）が不十分である。

事業目標

- 学習に困りを抱える児童の把握 … 正確な児童の実態把握に向けた複数名の教職員によるＩＣＴ端末を活用した見取りと情報共有
- 個別最適な学びの実現 … ＩＣＴ端末を活用した子ども一人ひとりのニーズに応じた学習展開
- 学習に向かう意欲の向上 … ＩＣＴ端末を活用した「自分でできる」「自分でわかる」という学習スタイルの構築
- インクルーシブ教育の実現 … 同じ環境で一緒に学び、互いに刺激しあいながら成長できる環境の実現及び
ＩＣＴ端末を活用したソーシャルスキルの向上
- 教職員の意識向上 … 特別支援教育に関する講演会や特別支援教育に携わる教職員を対象とした合同学習会の実施

2 事業実施体制

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業
〔学習障害のある児童生徒等に対するICTを活用した〕
効果的な支援に関する実践研究
玖珠町教育委員会

企画会議…支援学校の教諭を招き、どのように取組を進めていくか論議を行う。

特別支援教育コーディネーター会議…各校の課題について共通理解を行い、その改善に向け協議を行う。具体的な取組を決定し、各校で実践する。

企画会議

構成人数

15名

外部専門家

2名

【内 訳】

- 大学関係者 : 0名
- 学校関係者 : 14名
- 関係分野関係者 : 3名
(医療・福祉分野など)

開催回数

2回

(令和7年度)

【開催時期】

- ① 令和7年9月
- ② 令和8年3月

専門家の活用

配置人数

1名

主な経歴・専門分野等

- 学校法人西軽井沢学園
さやか星小学校
校長 青木 高光 氏

配置計画・活動内容

- 先進地視察の実施
指導を依頼した専門家の所属機関等を訪問し、視察を行うとともに、採択された事業計画について専門的な観点からの指導・助言をいただいた。
- 講演会の実施
専門家を講師として招き、玖珠町教職員全員学習会を開催した。
- 専門家による指導・助言
モデル校の紙媒体とデジタルの複合授業の観察をしていただき、具体的な指導・助言をいただいた。

<A校>特別支援学級関係の情報…知的学級:8名 自閉症・情緒:5名
 通級指導教室関係の情報…教室数:1 設置歴:2年目 指導形態:自校・巡回
 <B校>特別支援学級関係の情報…知的学級:2名 自閉症・情緒:6名
 通級指導教室関係の情報…教室数:1 設置歴:15年目 指導形態:自校・巡回

研究実践校

小学校 A

児童生徒数 179 名

教員数 30 名

(令和8年3月時点)

学校の特徴

校内支援体制…○特別支援教育支援員（5名）の学年配置【週1回作成】
 ○支援部会【週1回開催11名】
 児童の実態・支援の在り方について共通理解を図る。
 特別支援教育CN、特別支援学級担任（2名）
 通級指導教室担当（1名）、児童生徒支援加配教員
 （2名）、特別支援教育支援員（5名）
 ○連携会議【学期1回開催】保護者と各担任が児童の実態
 を共有し、今後の支援の確認などを行っている。
 特別支援学級…就学適正委員会までに、随時保護者面談を行いながら、
 来年度の希望について協議を行っている。その結果を受けて
 児童の状況に応じた学びの場が提供できるようにしている。
 ICT端末の活用…書画カメラと大型モニターをつなぎ、児童が視覚的に
 捉えやすいように工夫した授業を行ったり、教科書のQR
 コードを読み取って図形の学習に取り組んだりしている。
 また、アプリを使用しての学習にも取り組んでいる。
 ICT端末は、ほぼ毎日使用している。
 また、週末には持ち帰りを実施している。

小学校 B

児童生徒数 274 名

教員数 36 名

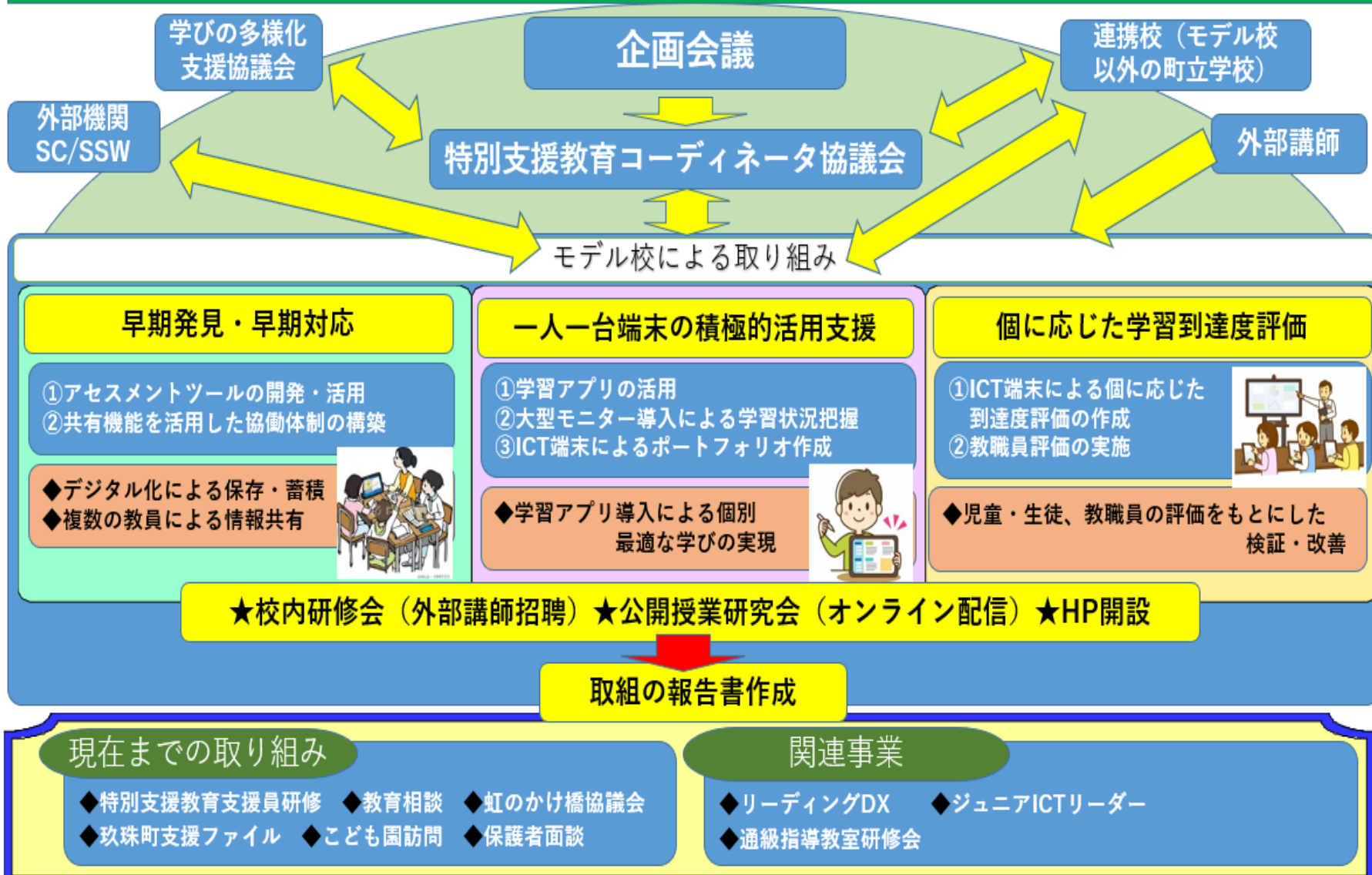
(令和8年3月時点)

学校の特徴

校内支援体制の整備…週ごとにICT端末を使ってシフト表を作成し、
 毎日のすべての時間において、支援の必要な
 学級・学年に特別支援教育支援員（6名）を
 効果的に配置できるよう努めている。
 校内委員会の開催…月1回、特別支援教育コーディネーターが中核と
 なり、管理職を含む関係教員と特別支援教育支援
 員が参加しての校内委員会を開催し、児童の実態・
 支援の在り方について共通理解を図っている。
 連携会議の開催…通級指導教室在籍児童および特別支援学級在籍
 児童の保護者と特別支援教育コーディネーター＋
 学級担任（交流学級担任含む）で連携会議を開催
 （学期に1回）。連携会議では、児童の様子の交流
 や情報共有、保護者の支援ニーズの確認などを行
 い、きめ細やかな支援につながるようにしている。
 ICT端末の活用…どの学級でもほぼ毎日使用している。3年生以上は
 毎日家庭への持ち帰りを実施している。

【取組概要図】

学習障害のある児童・生徒等に対するICTを活用した効果的な支援（概要図）



①企画会議
取組の大枠について協議

②特別支援教育コーディネータ協議会
企画会議の協議を受け、具体的な取組について共通理解を図る。

③モデル校による取組
3つの柱について実践を行う。

3 取組概要・成果

(1) 1人1台端末も活用した学習上の 困難の早期かつ客観的把握に係る 実践と検証

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業
〔学習障害のある児童生徒等に対するICTを活用した
効果的な支援に関する実践研究〕
玖珠町教育委員会

- アセスメントツールのデジタル化による客観的把握
- 専門性を確保した「校内支援部」による協働体制の構築
- リーダーシップに基づく校内研修と学校間連携の推進
- アセスメントに基づく迅速な保護者連携と通級指導への接続

取組内容（詳細）

- | | | |
|----------------|---|---|
| デジタルアセスメントへの変更 | … | 従来の紙媒体による様式を見直し、デジタル形式のアセスメントツールを導入した。（両校） |
| 校内支援体制の構築 | … | 特別支援教育コーディネーターを中心とした「校内支援部」と学級担任が密に連携し、診断名の有無に関わらず学習困難を抱える児童を早期に把握・支援する協働体制の構築に取り組んだ。（両校） |
| 専門性向上のための研修 | … | 校長のリーダーシップのもと、特別支援教育に関する校内研修を充実させるとともに、コーディネーター会議を通じて他校との連携や情報共有の活性化を図った。（両校） |
| 通級指導への円滑な接続 | … | 教職員の協働によるアセスメント結果に基づき、保護者面談を迅速に実施し、個別のニーズに応じた通級指導教室へのスムーズな移行を行った。（両校） |

特色・ポイント

- | | | |
|---------------------|---|--|
| デジタルシステムによる客観的な実態把握 | … | 端末を活用することで、複数名の教職員による多角的な「見取り」が可能になるとともに客観的な実態把握が実現できた。 |
| 個別の指導計画の統一 | … | デジタルシステムの導入により、これまで学校ごとで様式が異なっていた個別の指導計画の様式を統一した。評価の妥当性が確保され、教職員間での共通理解を深めることにつながった。 |
| 組織的な「一体感」の醸成 | … | 管理職の強い牽引力による学校全体の協働体制が構築され、校内支援部と学級担任の連携が図られるようになった。 |

取組の成果

- | | | |
|----------------|---|---|
| 早期把握と機動的な支援の実現 | … | デジタル化によりアセスメントの効率が向上し、学習困難児童の早期発見から保護者面談、支援開始までの時間を短縮することができた。 |
| 指導の個別最適化 | … | 児童一人ひとりの特性や困難に応じた具体的な指導法が少しずつ明らかになり、学習上の困難の解消に向け役立っている。 |
| 情報の蓄積と継続的な活用 | … | デジタルデータの蓄積により、学年更新時や進学時における情報の引き継ぎが容易となり、将来を見据えた一貫性のある支援体制が確立された。 |

- 個別のニーズに適合した学習アプリの導入と活用
- 教材選定プラットフォームの構築と組織的な運用
- 外部専門家との連携による授業実践の高度化

取組内容（詳細）

- 個別最適化されたアプリの導入 … 児童一人ひとりの特性や学習上の困難に合わせ、基礎学力の定着を支援する学習アプリの導入を行った。（個別の指導計画を作成している児童生徒対象）
- プラットフォームの構築と選定体制の整備 … 教員・児童双方が活用しやすいプラットフォームを構築し、特別支援教育コーディネーター会議での協議に基づき、有料アプリを含む教材を選定した。（町全体）
- 専門家による授業改善の実施 … 外部専門家による授業観察を通じ、紙媒体とデジタルのハイブリッド指導、読み上げ機能の活用、適切な検索の重要性について具体的な指導・助言をいただいた。（モデル校）

特色・ポイント

- 学習状況の一斉把握とリアルタイム支援 … モニターと連携した学習管理アプリを活用し、教員がクラス全体の学習状況をリアルタイムで把握できるようにし、つまづきを見せた児童に対し、個別指導を行う体制を構築した。
- 専門家の知見に基づく環境整備 … 「読み上げ機能」などのアクセシビリティ機能を積極的に取り入れるとともに、児童が混乱しないための「明確な指示の提示（構造化）」を徹底した。
- コーディネーター主導の教材選定 … 個々の児童の「学習上の困難」の解決に向けたツールを、組織的な合議（コーディネーター会議）を経て選定した。

取組の成果

- 学習意欲の向上と心理的負担の軽減 … 合理的配慮に基づくアプリ活用により、児童の学習に対する意欲向上が見受けられ、苦手意識の克服に寄与した。
- ICT活用の質の向上 … 専門家からの助言により、単なる端末利用に留まらない、検索の適切性や提示の工夫といった「指導の質」に直結する改善ポイントが明確化できた。
- 効果検証の深化 … 意欲向上などの質的変化は確認されたが、学力定着や行動変容に対する定量的・客観的な効果検証の実施が次期フェーズの課題である。

4 今後の課題と展望

発達障害のある児童生徒等に対する支援事業
〔学習障害のある児童生徒等に対するICTを活用した
効果的な支援に関する実践研究〕
玖珠町教育委員会

課題…支援の連続性と合意形成における体制的課題、「個別の指導計画」の実効性と指導の最適化、ICT利活用の基盤整備と有効性検証

展望…「切れ目のない支援」を実現する広域・継続的な連携体制、「生きた指導計画」への転換と指導の高度化、データとAIを活用した支援の最適化と環境整備

令和7年度事業における課題

① 情報の連続性、合意形成の不足

就学前機関からの引き継ぎ情報が不十分なため、入学時の早期実態把握に遅れが生じている。

また、支援の必要性について保護者の理解と合意を得るまでに時間を要しており、「切れ目のない支援」を展開するための組織的な連携・対話体制に課題がある。

② 計画作成の形骸化、デジタル活用のバランス

指導計画の作成自体が目的化し、実際の指導や評価に活用しきれていない「形骸化」が起きている。

加えて、ICT活用の推進に伴い、デジタルの利点とアナログ手法の重要性を児童の特性に合わせていかに組み合わせるかという、「ベストミックス」の探求と実践力の向上が求められる。

③ アプリの有効性検証、教材作成の負担、プラットフォームの未整備

導入したアプリが学習困難の解決に直結しているかという客観的な検証が不足している。また、個別教材の準備に伴う教員の負担増が対面でのきめ細かな指導時間を圧迫している側面もある。

これらを解消するための、有効な手法の共有基盤（プラットフォーム）の構築と、効率的な教材作成体制の整備が急務である。

令和8年度事業における展望

〈町統一チェックリスト、支援履歴デジタル化〉

入学前からの「町統一チェックリスト」を導入して実態把握の早期化を図り、就学前から進学まで一貫した支援体制を構築する。

また、支援履歴をデジタル化して蓄積・共有することで、担当者変更や進学時にも支援の質を落とさない、「人」と「時間」を繋ぐ確実な引き継ぎ体制の確立をめざす。

〈実活用重視の運用、デジタルとアナログのベストミックス〉

指導計画に具体的な活用アプリや支援手法を明記し、作成すること自体を目的とせず、実際の授業で活用し改善し続ける「PDCAサイクル」を回す。専門家の知見を導入し、読み上げ等のデジタル機能と手書き等のアナログ手法を融合させた「ベストミックス」の授業実践を定着させ、指導の質の底上げをめざす。

〈支援効果マトリックス、生成AIによる個別最適化〉

学習困難の特性と有効なツールを整理した「支援効果マトリックス表」を作成し、最適な支援を誰もが選択できるプラットフォームを構築する。あわせて、生成AIを活用したスモールステップ問題の即時作成により、児童への個別最適化された学習提供と、教員が対面指導に注力できる業務環境の改善をめざす。